

9月7日(金) 研究発表第4室(2号館201)

『読解指導』における Top-down Processing Approach と Bottom-up Processing Approach との比較に関する一考察

A Study of Teaching Reading Comprehension: Top-down Processing Approach vs Bottom-up Processing Approach

東京都立航空工業高等専門学校 寺内 正典

はじめに

日本の英語教育における『英文読解』の指導法の主流を占めているのは、現在においてもやはり旧態然とした『文法訳読法』であるというのが、現状である。また周知の如く、『訳読主義の指導法の功罪』に関しては、従来から多くの論議がなされ、様々な角度から問題点が提起されている。しかしながら、それを科学的・客観的に示す実証的データは、意外なことに驚く程、少ない。特に日本の高校生を被験者とした者は、発表者の知る限りほとんど見受けられない。

研究の目的

『読解のプロセス』は、概して Top-down Processing Approach と Bottom-up Processing Approach との二つのプロセスに大別できる。本研究では、この両プロセスが存在するという仮説をふまえ、各プロセス毎に実験群と統制群を設定し、各プロセスに基づく指導法を仮説実験授業として一定期間行う。その後、両群を対象とする「読解力テスト」の結果に基づき、両プロセスを比較・検討し、さらにその実証的データに基づき、『訳読主義の指導法の功罪』について考察することを目的とする。また、その結果に基づき「コミュニケーションを目指す読解指導のあり方」について具体的に提言したい。

研究の仮説

1) Top-down Processing Approach に基づく(実験群の)指導法の方が、Bottom-up Processing Approach に基づく(統制群の)指導法よりも、読解力(内容理解力・主題把握力等)を向上させるのに、より効果的である。

9月7日(金) 研究発表第4室(2号館201)

## 研究の方法

1) 先行研究に基づく文献研究(『読解指導』の理論的基盤の変遷等) 2) 『読解指導』の現状に関する教員対象の調査 3) 仮説実験授業(「Top-down Processing Approachに基づく指導を中心とする」実験群と「Bottom-up Processing Approachに基づく指導を中心とする」統制群の両群を設定した授業)のデータに対する統計学的アプローチに基づく分析と考察 4) 実験群の学習者に対する反応分析に関する調査等を行うことにより、仮説を実証的に考察し、検証する。

## 結論

仮説実験授業後の「読解力テスト」の結果から、Top-down Processing Approachに基づく指導法の方が、Bottom-up Processing Approachに基づく指導法より、学習者の読解力を高めるのにより効果的であることが統計的な有意差として検証された。この結果に基づき、Top-down Processing Approachを中心とする「コミュニケーションを目指す読解指導のあり方」について具体的な指導展開例を提案する。